

# 江戸川デルタ調査雑記

昭和35年11月

例年のことながら徽音祭に備えての調査が三年になるや私達の頭の中に往來した。4月5月と日がついてあせり気味、それでも6月には大体の地域を決めることが出来て下検査の方々現地におもむいた。7月になって此邊遠征行ボケした頭でもっと具体的にと相談して江戸川デルタ先端部舊西地区の地域調査ということになった。

その以前に徽音祭に発表するものとしての調査は人々にアピールするものではなくては、否、私達の研究の成果をみてもらうのであるから純粹の研究報告式に近いものをもと意見練出、行き着くところは……あの結果をみて下さればおわかりのことと思います。

秋になり試験も終った頃、突際に活動し始めた。江戸川デルタは東京のお台所、パセリにセロリ、赤かぼ、アメリカなす、西まだまだ、お花に金魚の名産地という近郊農業地帯を形成している。その上デルタ先端部という地域上、ハス田がかなりあり、海にはハマグリ、アサリにお魚という具合である。このような地域で先づ私達は何を中心として調査していくかであった。地域調査とはいへ今日の問題に何らかの関連したものをということではこの地域で浅草のりの不作という問題に注目した。それにこゝは都心に近いとはいへ周囲には大工場地帯がせままっているにもかゝらぬ依然として第一産業が行われ都市化していないのは何故か、デルタ先端部という自然条件に大きく影響されているものは何か、将来工業地帯となるか等多くの疑問をもって調査しはじめた。夏休み前より訪ねた山鹿先生や小松川高校の山本先生などにもお会いしていろいろ御意見を伺ったり資料を農供して頂いた。山本先生にお会いした時の感激は是非こゝで述べなくてはならない。何故なら私達の方向を決定するものにしたのである。山本先生は千葉県浦安町を十年近くも研究しておられ、そのフアイトのあること私達同姓として頭の下る思いでした。農業の町浦安の性格やら風物など詳細にお話して下さい、スライドなどもみせて下さったり調査方法にも多くの暗示をして下さるなど私達は急にカと勇氣を与えられたような気持でした。こゝでデルタ先端部の漁業をとり扱うには浦安をも含めなくてはと悪い行政上東京都と千葉県にまたがって不都合とは悪いながらも両地域を比較しながら調査しようということになった。資料集めには確かに二倍の労力を要した。このことは都府のお役人さんにも指摘

拙されたところであるがそれにも負けず(?)やはり私達は山本先生にお会いした時のあの感激を忘れず、私達の設定した地域の認識に努力(?)奮闘(?)をしたのでした。農林省、区役所、郡庁、役場、のり店、漁協などを駆けずりまわった。あるときは朝から戸別訪問をして少しずつこの地域というものを把握していった。戸別訪問は統計として得られるものはわずかであるが、私達個人の頭の中にいろいろな印象深いことが残り統計が骨ならばその肉付けともなる役割を果たしてくれました。それにここで生活している人々の生きた声もほんの文献にも勝つて新鮮な知識として印象深いものがありました。もちろんうのみにはできませんし、それをどのように消化するかは私達のカリコに任せてくるのです。

「近年になつてのりがとれなくなった」の声は至る所できかれました。その原因はとさけば暖かくなつた、と工場の汚水が何よりも重大だ、の声がほとんど。中にはお寺の境内でのりの調(パーム)を整えていたおじさんは東京にあまりに人口が乗まるため東京の気候は暖かくなりのがとれなくなつたのだらうなと珍奇な三段論法を教えてくれて私達も思わず苦笑してしまつたりした。

浦安は貝の町で至るところでおかみさん達が陽だまりにうずくまって貝むちきをしている。「お台所は確かに外にある」「公益質屋が多いわね」など山本先生のお話を思い出しながら歩く。同じような敷並が道路に沿つて迷路的景観を呈している。葛西の大部分の家がそうであるように半農半漁の家とは大分異なつている。貝を採ることだけで生活している家やのりをも含め夏に農業も行なつている割合豊かな家庭などを一軒一軒まわつてはいろいろなことを聞いて歩いていくうちにこんな具合に生活している人もあるのかと驚くことなどあつてこの地域というより人間生活のさまざまの状況にいる人々に対する認識をあらたにした。

一日の仕事が大体片付いた頃私達はデルタ先端部のさらに先端へと歩いて行ったこともある。道が水田の中に没していてもデルタの真中を歩きまわることにはできずひきかへした。そこは今だに泥海の手し上がったばかりの所にアシなどが生え、荒地になつて利用されていないような所なのである。もちろん海との境はコンクリートの海岸堤防になつているが。その厚い泥の中に盛土して建てられた一軒の家や二三本の松の木などはさすがにデルタ地帯だなという感じを抱かせたものだった。だがその泥質で湿めつたまゝの圃ちこんな景観を呈している地域範囲もこの辺一帯とはいへば人のわすれがであることも私達に認めさせてくれる。大工場の煙突が林のように遠く立ちならんでいるのがみえる。遠く立ち並ぶ工場の煙を背景に東京湾に面して水田と盛土されて建てられた家並のこの町は一体将来どのようなふうになるだらう。もうこの年もしたら誰か交遊することだらうなど考へながら秋の日の沈む頃一日の戸別訪問をおわつて町のバスのりばへ急ぐ。焼ハマグリの香ばしいおとりがここからとも漂ってくる。その香りに誘導され素の上焼ハマグリ屋へ姿をくまます……ハマグリをくしにさしたり焼いたりする女の人達が所狭しといる中で「毎日どのくらい焼くのですか」「どちらへ売出しますか」等質問がや……今思い出してもなつかしくなる。

このようにして暗中模索の状態で始まつた調査も完全なものにならないうまでも一応まとめ終つた時はほつとしたが、今考へてみてその結果というより過程において私達の得られたものは多かつたように思われる。